

山と博物館

第52巻 第9号 2007年9月25日

市立大町山岳博物館

唐沢岳幕岩

柳澤 昭夫

第2次世界大戦前、ヨーロッパアルプスの登攀に伍して、昭和10年前後には、積雪期の登攀が、鹿島槍北壁、荒沢奥壁を舞台に展開された。こうしたアルピニズムを追求する登山も第2次大戦で中断、昭和

20年代後半から30年代にかけて再び盛況を迎える。いわゆるクラシックルートの積雪期登攀時代である。そして、30年代半ばには埋め込みボルトが考案され、谷川岳衝立岩で使われる。今まで登攀不可能と思われていたクラックの無いツルツルの一枚岩や乗り越すことが不可能と思われていた大きく覆い被さるオーヴァーハングもこの埋め込みボルトを打ち込み、アブミをかけて登る人工登攀の技術によって登攀することが可能になった。谷川岳から穂高の屏風岩、黒部丸山東壁、奥鐘山西壁、そして、この唐沢岳幕岩の大岩壁の登攀時代が始まる。

黒部丸山東壁で、中央壁に、東京緑山岳会が長い縄梯子を掛け、映画撮影をしながら登攀しているのを見たときは衝撃的であった。私の所属する大町山の会でも大きな話題になった。大きな奥鐘山西壁の話とともに、この唐沢岳幕岩は知られざる大岩壁であると言う。さっそく偵察に出かける。この年山嶺登高会が初登攀した。この岩壁にルートを開こうと私達の幕岩通いがはじまった。幸運にも、幾つかの初登攀と冬季の初登攀をすることができた。私の登山は、鹿島槍荒沢奥壁北稜の初登攀者小谷部全助の登山を超えたいとして始まったが、言い知れぬ不安に押し潰されそうになりながら冬の幕岩に魅せられて、いつしか幕岩にのめりこんでしまった。

(大町山岳博物館館長)



ツキノワグマの 2006年大量出沒の要因を考える

岸 元 良 輔

はじめに

昨年(2006年)度は、ツキノワグマ(以下、「クマ」)が全国的に大量出沒し、有害鳥獣駆除により4,300頭以上が捕殺されるなど、大きな社会問題となった。長野県でも有害による捕獲数がこれまでの記録を大幅に越え、非捕殺を含めた捕獲数は704頭で全国1位、捕殺数は558頭で山形県に次ぐ全国2位であった。長野県では、平成7年に県独自のクマの保護管理計画(平成14年以降は鳥獣保護法にもとづく特定鳥獣保護管理計画)が策定され(長野県1995、2002、2007)、狩猟と個体数調整(有害鳥獣駆除)をあわせた年間の捕殺数が150頭以内に抑

人里への大量出沒

長野県森林整備課によると、2006年

えられてきた(図1)。ただし、1999年と2001年は制限を越えている。しかし、2006年度はこの計画がまったく機能しなかった。なぜ、このような大量出沒が起きたのだろうか。



写真 トウモロコシ畑に出沒するツキノワグマ
(撮影:後藤光章氏)

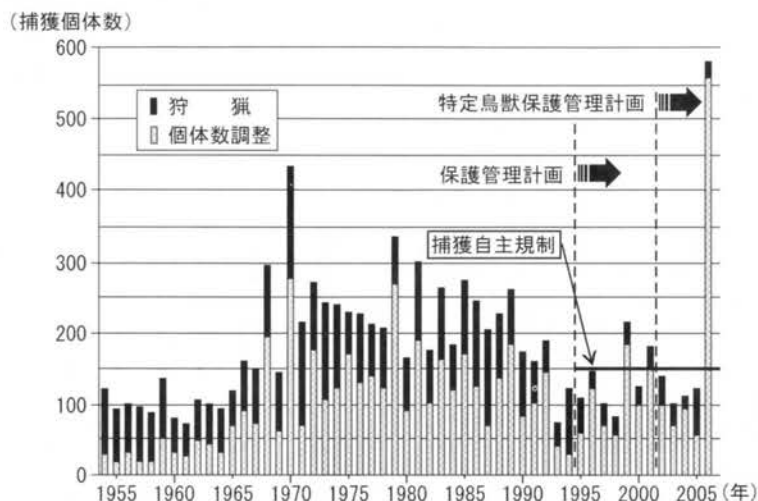


図1 ツキノワグマの捕殺数の推移(長野県林務部森林整備課資料より)

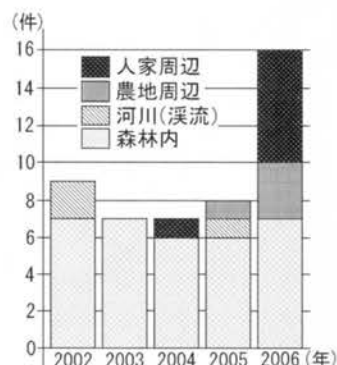


図2 ツキノワグマによる人身被害の発生場所(長野県林務部森林整備課資料より)

度の日撃・痕跡件数は、3月末で4,554件に達した。これは、前年同期比の4.4倍にのぼる。その内訳をみると、林内では1,187件で前年比の2.6倍、集落内では3,367件で前年比の5.6倍で、特に集落内での件数が激増している。長野県におけるクマによる人身被害は、ここ数年は8件前後で推移してきた。しかし、2006年度の人身被害はほぼ2倍の16件で、計18名の方が被害にあっている。これまでの人身被害は、ほとんどの場合、森林内などクマ本来の生息地で発生している。ところが、2006年度は、半数以上の件数で自宅の庭や畑などで発生している(図2)。

以上のことから、2006年度はクマがこれまでにない森林を離れて、集落周辺にまで徘徊していたことがわかる。

里山の環境変化と人里に接する生息域

2006年度の大量出沒の要因のひとつとして、里山が放置されて人

の生活圏とクマの生息地の間に緩衝帯がなくなり、直に接してしまっことが背景にあると考えられる。これについて、長野県環境保全研究所飯綱庁舎が位置する長野市飯綱高原周辺を例に考えてみたい(長野県自然保護研究所2004)。おそらく、長野県各地で同様の状況が起きていると考えられる。

長野市飯綱高原(標高1,000m)と長野市街地(標高300m)の間の地域は、集落、田畑、果樹園、トウモロコシ畑、二次林などがモザイク状に分布する、いわゆる里山と呼ばれる地域である。この地域では、最近10年ほどでクマの目撃件数や農作物被害が多くなり、市街地に接する果樹園でも被害がみられるようになった(長野市2003)。聞き取り調査によると、この地域は、昭和30年(1955年)頃までは薪炭林や建築用材として利用され、開けた環境だったと考えられる(長野県自然保護研究所2003)。しかし、近年は、このような用途がなくなり、放置されてクマが好む森林に変わりつつある。また、戦後にリンゴやトウモロコシなどが盛んに栽培されるようになり、クマを誘引する原因となっている。さらに、この地域に定着した成獣メスのクマが、長野市街地から1kmも離れていない林の中で冬眠し、出産したことを確認している。このことは、人里周辺で育つクマがはじめていることを示している。

2006年度の餌不足

里山の放置による環境変化は、長い年月をかけて進行してきた要因であり、急激な大量出沒はこれだけでは説明できない。2006年度は、このような背景のうえに、さらに深刻な餌不足が重なったと考えられる。

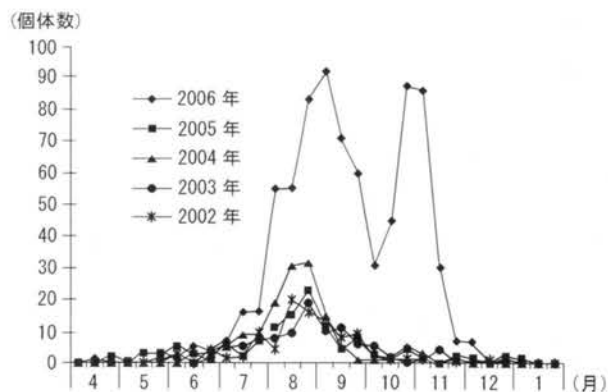


図3 2006年度のツキノワグマの捕獲数の推移(ビッキオ2007)狩猟を除く

長野県におけるクマの捕獲数(個体数調整、学習放獣、錯誤捕獲の放獣を含む)の月別推移をみると、2002と2005年度の通常年では8月中旬より下旬にピークがみられる(図3)。これは、クマにとって夏期は山での餌が少なくなるうえに、この時期にトウモロコシや早生のリンゴが実りクマの被害が多くなるのが原因として考えられる(長野市2003)。また、9月中旬以降は山で堅果類が実って餌が豊富になり、農作物被害が減少するために捕獲数が減ると考えられる。これに対して、2006年度は8月上旬から例年よりも捕獲数が顕著に増え、9月上旬に大きなピークがあり、10月上旬に一旦下がるものの、10月下旬より11月上旬に再びピークがみられる。このことから、夏期及び秋期にそれぞれ例年になく餌不足が山の中で起きたことが推測される。

夏期の餌は、ハチやアリを中心とした昆虫など動物質の割合が高くなる(橋本・高槻1997)。しかし、2006年の夏期はスズメバチ類の発生が例年になく少なかった(ビッキオ2007)。おそらく、ハチ類だけでなく、ハチ類の発生を抑えるような気象条件などの原因により、他の昆虫類や果実などクマの餌となるような動植物が少なかったかもしれない。

秋期は、ブナ、ミズナラ、クリなどの堅果類がクマの食性の主要な品目になっている(橋本・高槻1997)。長野県森林整備課は、クマの出没予測を行うために、2002年よりミズナラ、コナラ、クリ、ブナの豊凶調査を行っているが、2006年はクリ以外は「凶作」と判定されている。2006年度の捕獲数は、10月上旬に捕獲数が下がっているが、これはクマが一旦は山にもどって堅果類を食べ始めたためと考えられる。しかし、ミズナラやコナラなどが凶作であったため、再び人里に下りるようになり、捕獲数の2つ目のピークがみられたと考えられる(図3)。

捕獲個体の年齢構成

長野県環境保全研究所では、特定鳥獣保護管理計画に基づくモニタリングの一環として捕殺されたクマの頭部または頸骨をできる限り収集し、歯(主に第1小臼歯)により年齢を調べている。図4に、2001と2005年度に個体数調整により捕殺された168個体、及び2006年度の同様の367個体について、年齢構成を示した(2006年度のうち300個体は環境省の施行委任により実施)。これらのうち、ほとんどが農業被害、養魚場被害、人家周辺への出沒などにより駆

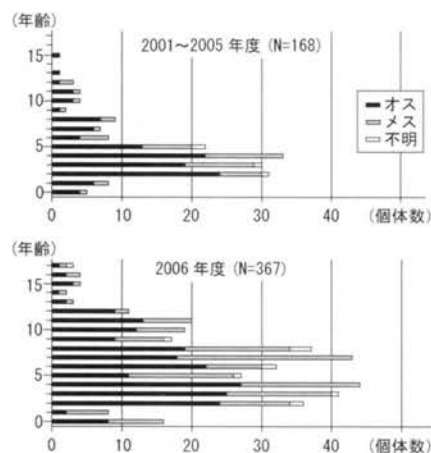


図4 個体数調整によるツキノワグマの捕殺個体の年齢構成

除されているので、図4は農地や人家周辺など人里に出沒する個体の年齢構成の傾向を示していると考えられる。

2001と2005年度の通常年は、25歳の個体が人里に出沒して捕獲される傾向であるのに対し、2006年度は同様の傾向に加えて、6と17歳のより高年齢の個体が通常年よりも顕著に多く捕獲されている。また、3歳以上の成獣メスの割合は、通常年の33.1%(N=121)に比較して、2006年度は高く41.6%(N=298)であった。以上の結果から、これまで人里にまで下りてこなかったような高年齢の個体や定着性が強いメスグマまでが人里に下りてきたと考えられる。このことから、2006年度には例年になく餌不足が山の中で起きたことが推測される。

今後に残された課題

長野県のクマの保護管理計画では、クマの捕殺数を150頭以内に抑えるかわりに、クマを誘引する果樹園やトウモロコシ畑を電気

柵で囲ったり、廃果や生ゴミを適正に処理したり、農地と森林の間を刈り払って緩衝帯をつくるなどの対策を推奨し、それなりの成果をあげてきている。しかし、2006年度のように、クマの本来の生息地である山の中で深刻な餌不足が起こった場合、クマを人里に誘引する要因を適正に取り除いたとしても、大量出沒は避けられなかっただろう。

これからも大量出沒の年が続いたり、周期的に起きる可能性がある。長野県では、これまで保護管理計画などにより長期的なクマ対策が行われてきたが、大量出沒の年にはどのように対処するかという短期的な対策については、まだほとんど白紙の状態といえる。これまでの保護管理計画では想定されていなかったような、新たな課題を突きつけられているように思う。

引用文献
橋本幸彦、高槻成紀(1997) ツキノワグマの食性—総説、哺乳類科学 37(1)—11

- 19
長野県(1995) ツキノワグマ保護管理計画、長野県、長野。
長野県(2002) 特定鳥獣保護管理計画(ツキノワグマ)、長野県、長野。
長野県(2007) 第2期特定鳥獣保護管理計画(ツキノワグマ)、長野県、長野。
長野県自然保護研究所(2003) 里山としての長野市浅川地域、長野県自然保護研究所、長野。
長野県自然保護研究所(2004) 野生動物の農林業被害対策と保護管理体制を考えるために、長野県自然保護研究所、長野。
長野市(2003) ツキノワグマによる被害を防ぐために、長野市、長野。
ビッキオ(2007) 平成18年度特定鳥獣保護管理計画(ツキノワグマ)モニタリング手法調査、長野県、長野。

(長野県環境保全研究所)

ザラ・針ノ木越えの検証(五)

小林 茂 喜

九 ザラ越えの偽装

それでは武功夜話の小坂孫九郎の述懐はどう考えればよいのでしょうか。

武功夜話を読めば明らかのように、成政は浜松や吉良に來ただけで越中へ帰ったわけではありません。前野村に顔を出し、清洲で信雄と会い、数日を経て越中へ帰っています。そのことは孫九郎自身が知っていることです。この述懐で大事なことは、信雄が浜松へ行く前に、孫九郎が家忠と会って、浜松行きを止められたということです。家忠が孫九郎に語った内容は、孫九郎が家忠から語られたこととして後に書きとめられたものです。先にも見たように、信雄と家忠が会う前に成政本人が浜松へ來たとは考えにくい。とすれば、成政に代わりうる誰かが、家忠とあつたと考えざるを得ません。家康との会談を調整するため、密使が家康の下へ送られたと考えるのが妥当ではないでしょうか。当時の状況の中では、事前に何の調整もなく家康と成政が会つたとはむしろ考えられないからです。

成政は清洲(の総見院)か前野村の周辺に潜み、密使を家康の下に送ったのでしよう。あるいは家忠自身がその取次ぎをしたかもしれない。もしそういう推測が成り立つなら、密使と家忠とを取り持ったのは、意外に孫九郎自身であつたのではないのでしょうか。孫九郎と家忠とは十月に少なくとも二度は会っており、かなり昵懇にしていた様子が家忠の日記からうかがわれるからです。そういう推測

が成り立つならば、なるほど孫九郎は信雄に同道して浜松へ行くことはできないに違いありません。

このようにして、さらさら越え、越信の陰難を越えるというのは偽装であつたのではないかと私は思います。誰も実際には通過したことのないザラ峠ですから、そして近い過去に前野小兵衛ら成政の將兵によって越えられているから、その偽装は容易でした。剛直な成政ならやりかねないという人々の思い込みも味方したでしょう。ザラを越えると部下たちに言い、そういう噂が自然に流れるようにして越中を出た。十二月初旬と見てよいでしょう。短時日のうちに清洲に至り、密かに家康、信雄と連絡を取る。十五日以後、二十四日に近いどこかで、吉良に信雄を訪ねた。二十五日に浜松で家康と会談し数日留まつた後、清洲へ取返して再び信雄に翻意を促そうとしたが功を奏しなかった。どこでも聞かれれば「実は越信の陰難を越えてきた。帰りもそうするつもりだ」と語つたにちがひありません。そのようにして味方をも欺き、夜陰にまぎれて前野村を出発し、飛驒領を経て二昼夜ほどで富山に帰り着く。陰難を越えるに現実的であり可能性がります。剛直な成政なら、まさにやりかねないことです。こうして偽装は見事に成功しました。しかし、そうやって偽装には成功したものの、肝心な時勢は味方しなかったのです。成政の無

念は察するに余りあります。

前野嘉兵衛はその事実を当然知っていました。しかし彼は、さらさら越えにも、またこの前後の状況にも何一つ触れることなく世を去っています。むしろ陰難を越えた名誉を、英雄の物語として、せめて残した方がいいと考えたのかもしれない。 (おわり)

(信濃史学会員)

付記

この検証においては伝承の類を全くとりあげませんでした。伝承はそれ自体大変興味ある対象で、いずれ、立山信仰や修験道、狩猟などとの関係から考察したいと考えています。現在のところ私の採録はまだ極めて不十分なので、別の機会に譲らせていただきます。

なお、文中、家康の次男(後の結城秀康)について、「於義丸」「於義伊丸」の両表記がありますが、「於義丸」としたいと思います。

【ザラ・針ノ木越えに関する文献資料】

- 1 甫庵太閤記 原本現代訳 教育社
- 2 家忠日記 大日本史料 図書刊行会
- 3 当代記 史籍叢書第二 KNB興産
- 4 肯構泉達録 新人物往来社
- 5 武功夜話 岡本慶雲原著写本
- 6 末森記 富山県立図書館蔵
- 7 越佐資料 名著出版
- 8 宗祖親鸞聖人御真筆名号累録記(松沢一登氏蔵)
- 9 東遊記 橋南齋勝村治右衛門手写
- ①二つのザラ峠 服部英雄 山と溪谷社
- ②佐々成政―悲運の智将― 遠藤和子 学陽書房
- ③佐々成政のすべて 花ヶ前盛明 新人物往来社
- ④佐々成政佐良越えに関する諸説をめぐって 広瀬誠 富山史壇

博物館だより

山岳博物館では山岳写真を募集しています。

山岳写真フォトコンテスト

アルプス一万尺

―岳都大町をめぐる山々―

募集テーマ

標高二四〇〇メートル以上の大町市の山々

※長野県大町市側から撮影したもの

懸賞

金賞 1点 パンフレット表紙に採用

銀賞 2点 ホームページに採用

銅賞 7点 8千円相当の商品券

入選 若干 2千円相当の商品券

※山岳環境に対するメッセージを添えて

いただいた方には、大町市オリジナル

エコバックを進呈

募集締切

平成19年12月2日(日) 必着

その他

カラーリバーサルフィルムからダイレクト

プリントした4つ切り等、応募に際して条件

がありますので、詳細は山岳博物館までお問

い合わせください。

山と博物館 第52巻 第9号

発行 千長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六 二二二二二

FAX 〇二六 二二二二二

E-mail: sanpuk@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp

印刷 株奥村印刷

定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七二二二九三